

戦前期の日本海軍と博覧会

—第1回内国勧業博覧会から軍艦博覧会まで

中嶋晋平

本稿は、軍による広報の視点から戦前期の日本海軍と博覧会との関わりについて検討することである。国内の博覧会で海軍が出品した最初の事例は、1877年の第1回内国勧業博覧会である。産業振興を目的としたこの博覧会では、海軍はその線に沿って出品しており、そこに広報としての意味は見いだせない。1907年の東京勧業博覧会では、海軍は日露戦争における戦利品や旅順港の模型を出品するなど広報の場として博覧会を利用していたが、一方で博覧会はさらに産業振興および娛樂的側面も重視していく。1914年の東京大正博覧会、軍艦博覧会ではその傾向がさらに強まり、海軍による飛行機の出展や実寸大の軍艦三笠を模した展示館は、最新の科学技術を来場者に提示するとともに、集客のための「見世物」として機能していた。以上の点から、戦前期の海軍は博覧会を広報の場として活用するとともに、主催者にとっても重要なパートナーであったと結論付けた。